

## スポーツタレント発掘における心理学的研究Ⅱ

—全日本・岡山県高校・岡山県ジュニア体操競技選手の比較事例—

後藤清志 \*<sup>1</sup>清水正典  
\*<sup>2</sup>大澤昭彦 \*<sup>2</sup>橋本幸博

### 要 約

アトランタオリンピックにより、わが国の国際競技力が次第に低下していることが明らかとなってきたが、このことの原因の一つに、選手養成のシステムに問題があることが指摘され始めている。特に少年期における指導のあり方に問題があるとされ、余りにも結果を急ぎすぎることがかえって選手の将来にわたる競技生活の継続の意欲を減退させているものと思われる。

本研究では、少年期の効果的なトレーニングの一貫としてのメンタルトレーニングに焦点を当て、そのうち、競技選手の性格的側面が少年期にいか形成されて行くのかを明らかにすることを通して、少年選手の効果的な指導に結び付けることを念頭において、その基礎データを収集することを目的とするものである。

第2回目となる今回の研究では、全日本、岡山県高校、岡山県ジュニアの年齢別比較を行い、全日本選手レベルの完成された性格形成に至るまでのプロセスを仮説的に導きだし、トップレベルに至るための少年期の性格の資質について、両親の性格との比較分析を通して言及することを試みている。

キーワード：スポーツタレント、体操競技、性格、気質継承

### 1. 緒 言

前回の調査より、全日本クラスの体操競技選手の気質特性には共通のパターンがあり、選手の両親の気質との類似性も明らかになったが、トップレベルの選手特有の気質が形成されるまでのプロセスは明らかにできなかった。特に、加齢に伴い気質的側面がどの様に変化して行くかについては、直接指導法にも係わってくる重要な問題であり、トップ選手の気質パターンが、選手のライフサイクルの比較的早い時期で形成されるものなのか、それとも、加齢にともない漸次形成されるものなのかは早急に解明しておかなければならない問題である。

---

\* 1 吉備国際大学

\* 2 岡山県立大学短期大学部研究生

この問題についての先行研究は、わが国ではまだ見ることができず、発達心理学の領域で、モチベーションに関する研究が若干見られるだけである。特にスポーツ分野ではライフステージ毎の競技選手の心理的構造を縦断的に検証した研究は、ほとんど見られないのが現状である。しかし、トップ選手養成を早期に開始する必要に迫られている現状では、各ライフステージごとの心理的特質の解明は是非とも必要な課題である。とくに少年期においては心理的特質の形成に、家庭環境とりわけ両親の及ぼす影響が大きく、親子関係の良否により形成される心理的特質は大きく違ってくるのが現実である。従って、単に選手本人の心理的特質のみならずその両親の心理的特質も把握した上でタレント発掘を進めて行く必要がある。

医学的見地からはすでに諸外国では、家系を視野にいれたタレント発掘を実施しているところもあるが、心理的タレントをも視野にいれたタレント発掘がなされている例は、現在のところ報告されていない。しかし、選手強化にスポーツ心理学が近年急速に脚光を浴びようになり、競技場面でのメンタルトレーニングが頻繁に利用されるようになってきた今日、タレント発掘に心理学が関与するのも時間の問題であり、そのための基礎データを收拾することはきわめて重要な作業である。

本研究では以上の視点にもとづき、岡山県高校、ジュニア体操競技選手及びその両親の気質調査を行い、それぞれの特質を明らかにすると共に、前回調査した全日本選手の結果と比較考察することを通して、ジュニアレベルから全日本レベルまでの気質の変化のプロセスについて仮設的に言及することを目的とする。

## 2. 方 法

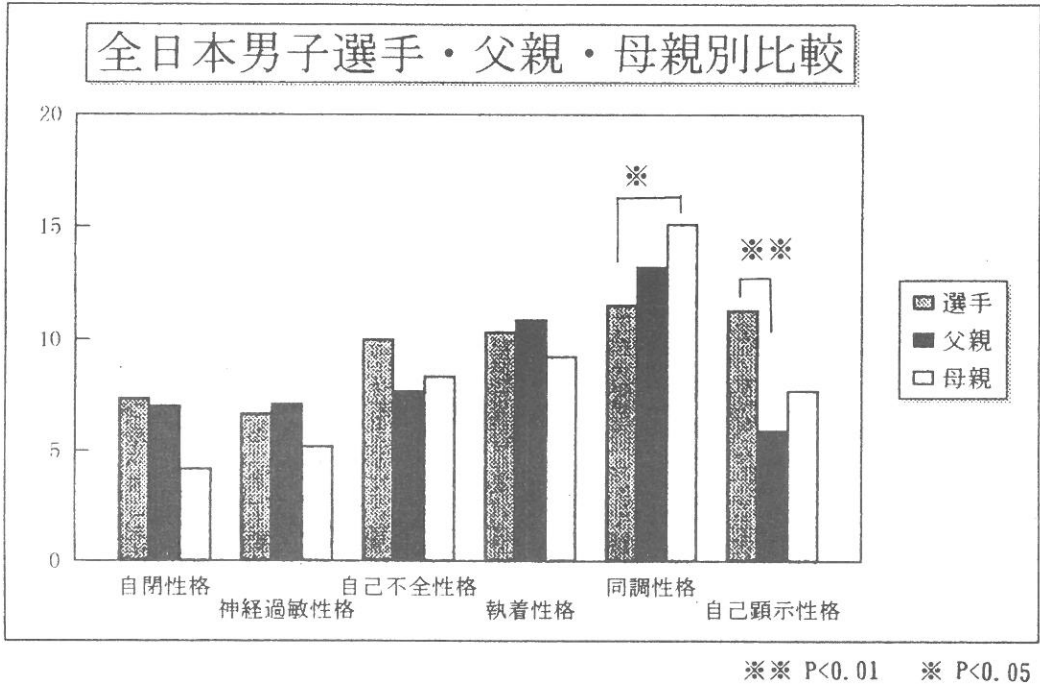
前回同様下田式SPI性格テストを用い全日本選手及び岡山県内の高校、岡山県ジュニア体操競技選手男子35名、女子37名の選手及びその両親に対して調査を行った。調査期日は1996年6月3日から同年8月30日までであり回収率100%であった。

## 3. 結 果

### (1) 全日本男子選手およびその両親比較

選手のパターンとしては自閉性格、神経過敏性格、自己不全性格、執着性格、同調性格の順でスコアが高くなり自己顕示性格と同調性格がほぼ同じスコアで並んでいる。基本的には緩やかな右上がりのパターンを示しており、自己不全、執着、同調、自己顕示の4つは比較的高いスコアを示している。父親も基本的には同じパターンを示し、自己顕示のみが選手より有意に低いスコアとなっている。母親もほぼ同じパターンであるが、同調では選手よりも有意に高いスコアを示し、自己顕示では低いスコアを示している。全般的に選手よりも両親の方が右に傾く傾向が強くていいる。(図1)

図1



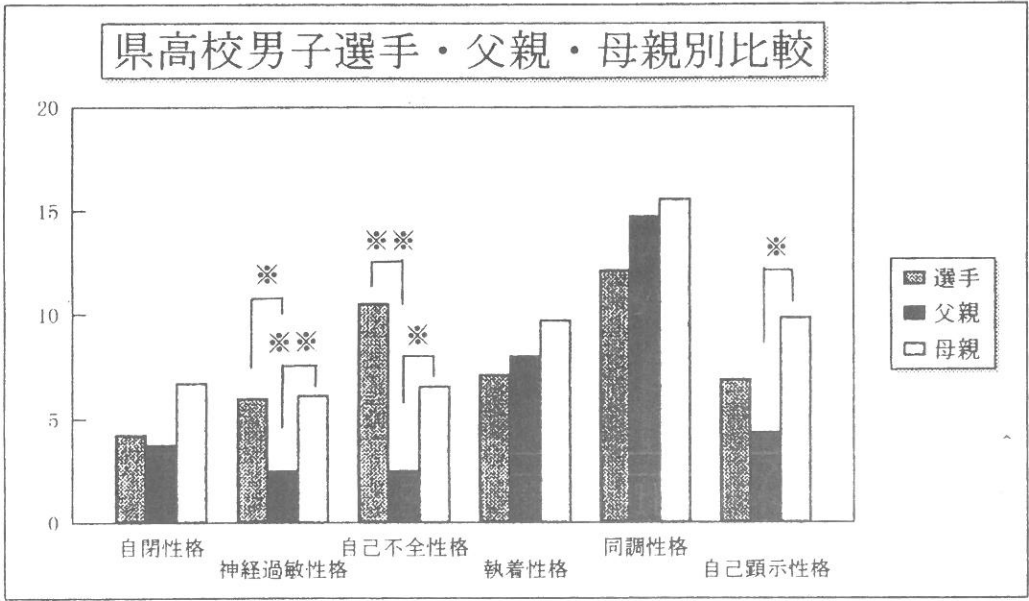
(2) 県高校男子選手及び父親，母親比較

選手では自己不全性格と同調性格に高いスコアが認められ，ほかの気質群ではスコアが低かった。一方父親は，同調性格が異常に高くほかの気質群ではきわめて低いスコアしか示していない。母親もパターンは父親と似て，同調性格のスコアが高いが，ほかの気質群では父親よりも全般的に高いスコアを示している。高校男子選手では父親よりも母親のパターンが選手に近く自己不全性格のみで異なる傾向が認められる。(図2)

(3) 県男子ジュニア選手，父親，母親別比較

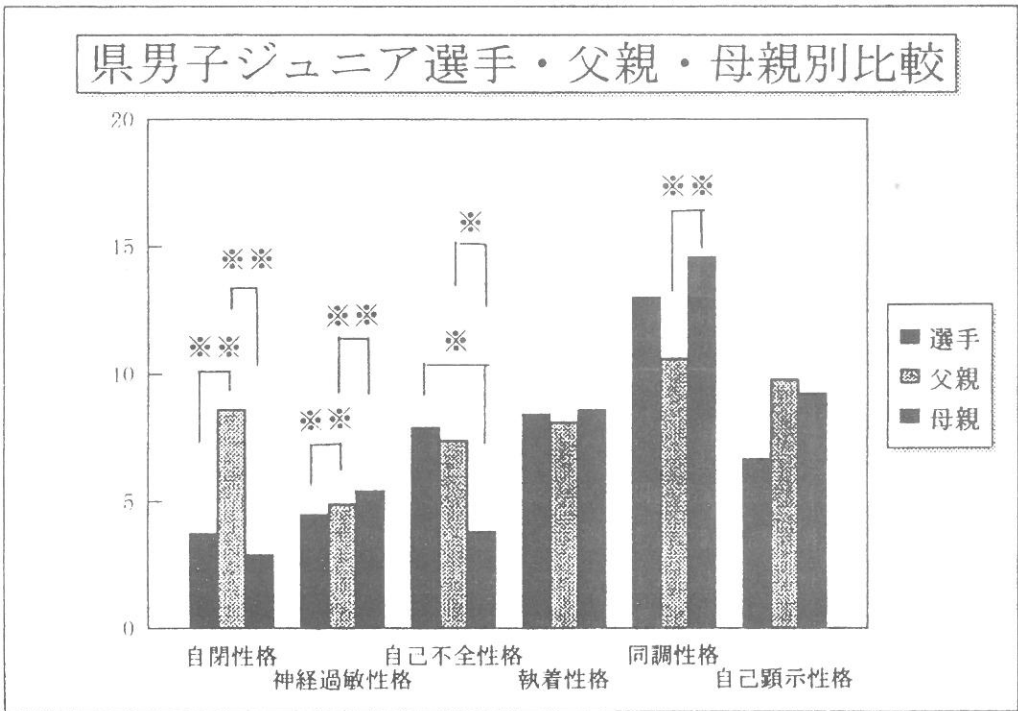
選手の基本的パターンは全日本選手と同様，右上がりのパターンを示し，同調性格で最も高いスコアを示している。一方父親は自閉性格で選手よりも有意に高いスコアを示し同調性格，自己顕示性格とほぼ同じレベルのスコアを示している。母親は自己不全性格で選手よりも有意に低いスコアを示しているほかはほぼ選手と同じパターンを示し，父親よりも高い類似性を有している。ただ全日本選手と比べて同調性格，自己顕示性格で選手よりもスコアが高くなっている点特徴的である。(図3)

図2



\*\* P<0.01    \* P<0.05

図3



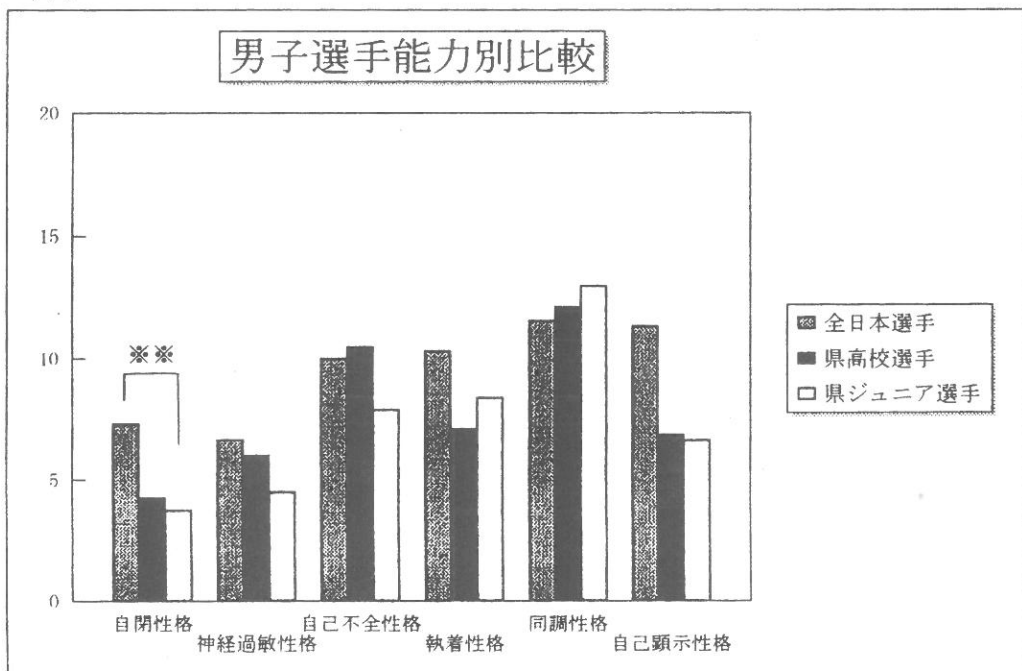
\*\* P<0.01    \* P<0.05

(4) 男子選手能力別比較

男子選手を全日本、県高校、県ジュニア別に比較してみると、自閉性格では全日本選手が県高校、県ジュニアよりもかなり高いスコアを示し、特に全日本選手と県ジュニア選手とでは統計的に有意な差が認められる。神経過敏性格では年齢が上がるに従いスコアが高くなり、自己不全性格では県高校選手が最も高いスコアを示している。執着性格では県高校選手が最も低く全日本選手が最も高いスコアを示しており、同調性格では年齢が上がるほどスコアが低くなる傾向が認められた。自己顕示性格では全日本選手が突出して高いスコアを示し、県高校、ジュニア選手はほぼ同じレベルにとどまっている。

全日本選手は自閉性格と自己顕示性格でほかの選手よりかなり高いスコアを示している点が特徴的である。(図4)

図4

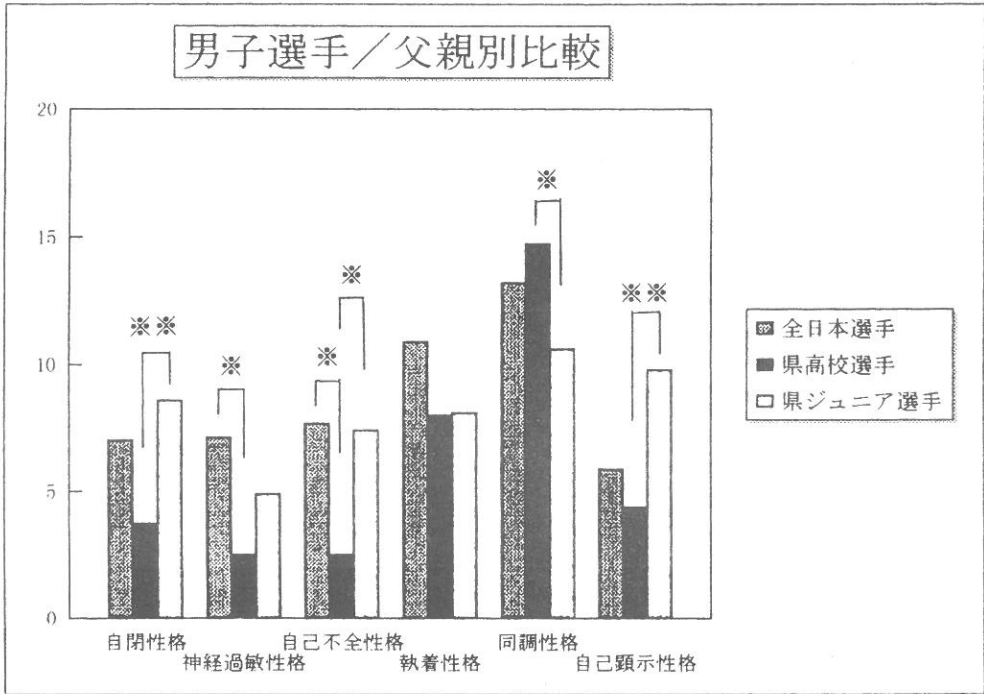


※※ P<0.01

(5) 男子選手父親別比較

同じ視点から父親の比較を行ってみると、自閉性格ではジュニア選手が最も高く県高校選手が最も低い。神経過敏性格ではジュニア選手が最も高く、県高校選手が最も低かった。自己不全性格では県高校選手が全日本選手、ジュニア選手よりもともに有意に低いスコアを示し執着性格、自己顕示性格ともに県高校選手が最も低いスコアを示しているが、同調性格では逆に最も高いスコアを示すなど県高校選手はほかのレベルと違いかなり特徴的なパターンを示している。父親の気質のパターンはレベルによりかなりの違いがある点が特徴的である。(図5)

図5



※※ P<0.01 ※ P<0.05

(6) 男子選手母親別比較

一方母親は、自閉性格と自己不全性格以外はどのレベルもほぼ同じスコアを示し、父親ほどの違いは認められない。また、自閉性格、神経過敏性格、執着性格、同調性格、自己顕示性格でいずれも県高校選手の母親が最も高いスコアを示している点が特徴的である。(図6)

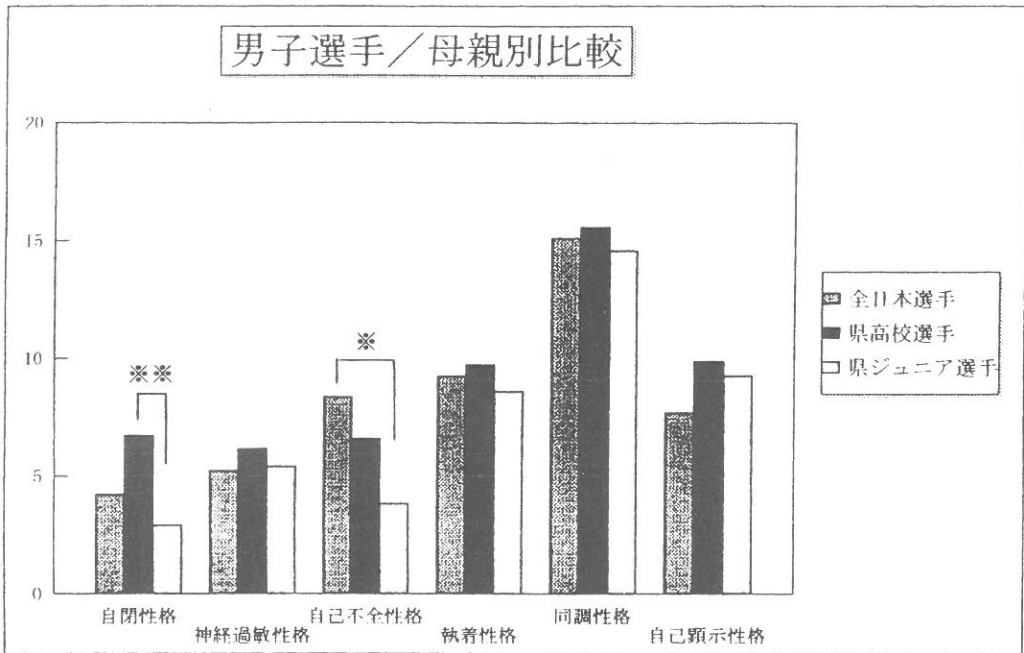
(7) 全日本女子選手・父親・母親別比較

基本的なパターンは男子とほぼ同じであり、同調性格をピークとする右上がりのパターンを示している。自閉性格では選手のスコアが最も高く母親のスコアとは有意な差が認められる。逆に神経過敏性格では母親のスコアが最も高く父親とのスコアの間には有意な差が認められた。自己不全性格では選手が最も高いスコアを示し執着性格では父親が最も高いスコアを示している。同調性格では三者とも最も高いスコアを示しているが両親の方が選手よりもスコアが高い点が特徴的である。自己顕示性格では三者ともまったく同じレベルである。(図7)

(8) 県高校女子選手・父親・母親別比較

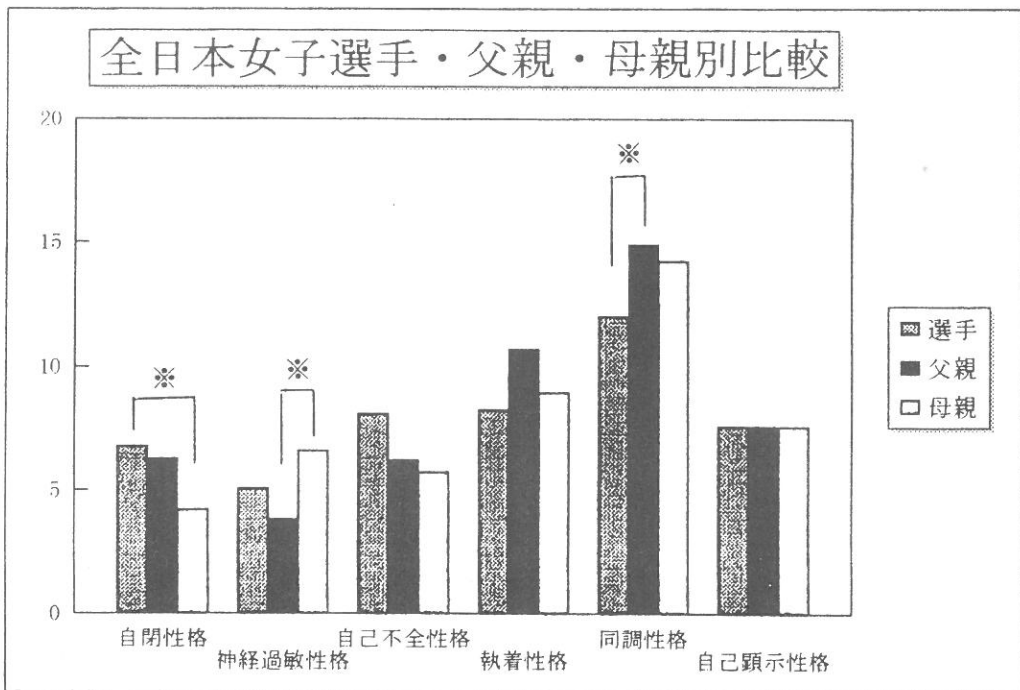
三者ともほぼ同じパターンを示している点がきわめて特徴的である。全体的なパターンは全日本選手とほぼ同じであり同調性格をピークとする右上がりのパターンを示している。男女を通じて、全日本、高校、ジュニアのなかでは親子間の気質のパターンが最も一致した例である。(図8)

図6



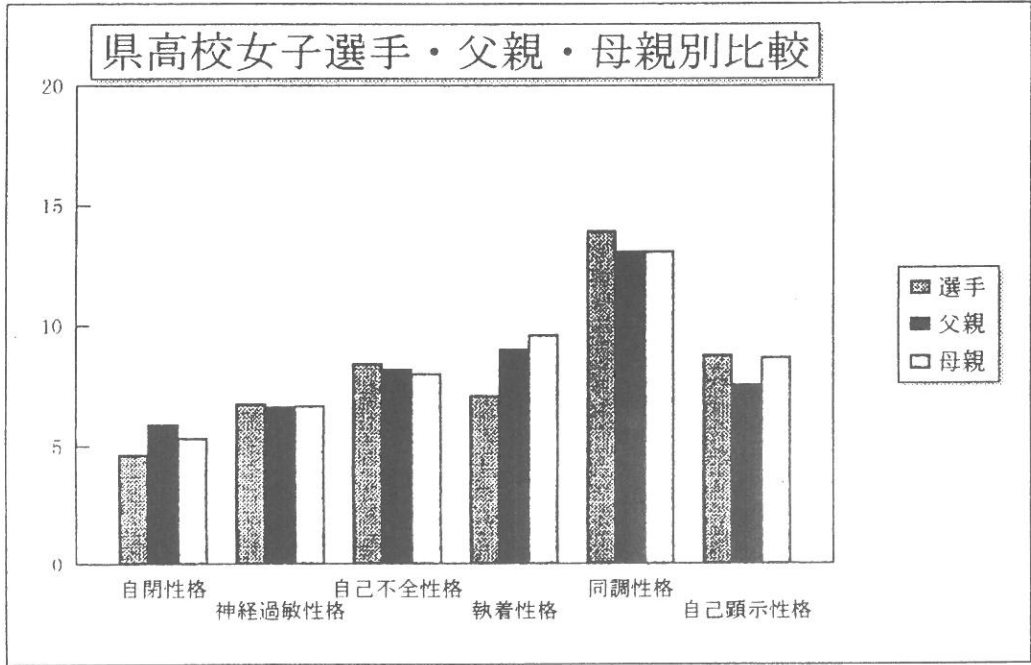
※※ P<0.01 ※ P<0.05

図7



※ P<0.05

図8



(9) 県女子ジュニア選手・父親・母親比較

同調性格をピークとした右上がりの傾向は、選手に顕著に現れている。このクラスの父親は全ての気質群で平均的なスコアを示しているが、母親は神経過敏性格、自己不全性格、自己顕示性格で最も高いスコアを示した点が特徴的である。(図9)

(10) 女子選手能力別比較

全日本、高校、ジュニアの能力別に比較してみると、全体的な傾向は三者ともほぼ共通のパターンを示している。すなわち同調性格をピークとした右上がりのパターンであるが、自閉性格では全日本高校、ジュニアの順にスコアが低下し、三者のスコアの間には有意な差が認められている。神経過敏性格では高校生が最も高いスコアを示し、全日本及びジュニアが同じレベルのスコアであり、自己不全性格でも高校生が最も高いスコアを示しているが全日本選手もほぼ同じレベルのスコアを示し、ジュニアだけが低いスコアとなっている。執着性格、自己顕示性格では三者の間に順位性が認められないが同調性格では全日本、高校、ジュニアの順にスコアが高くなる傾向が認められる。三者の間に何等かの順位性が認められるのは自閉性格及び同調性格の二つだけである。(図10)



図9

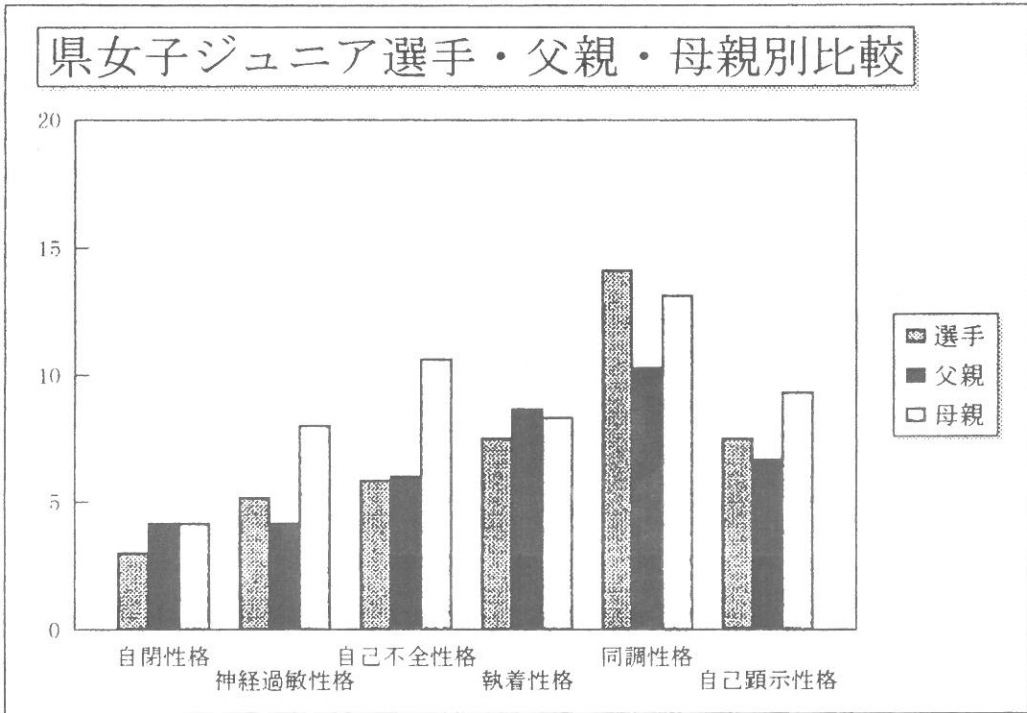
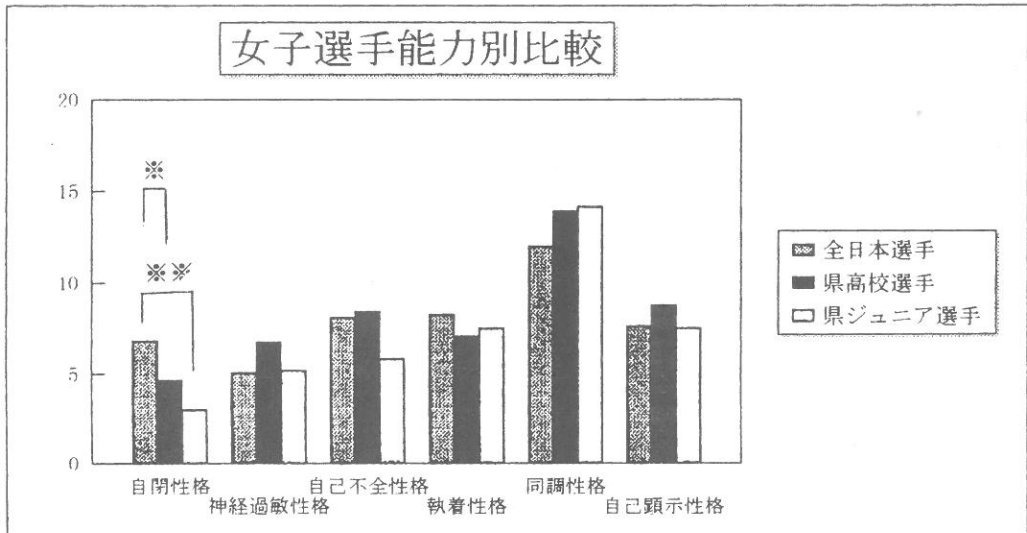


図10

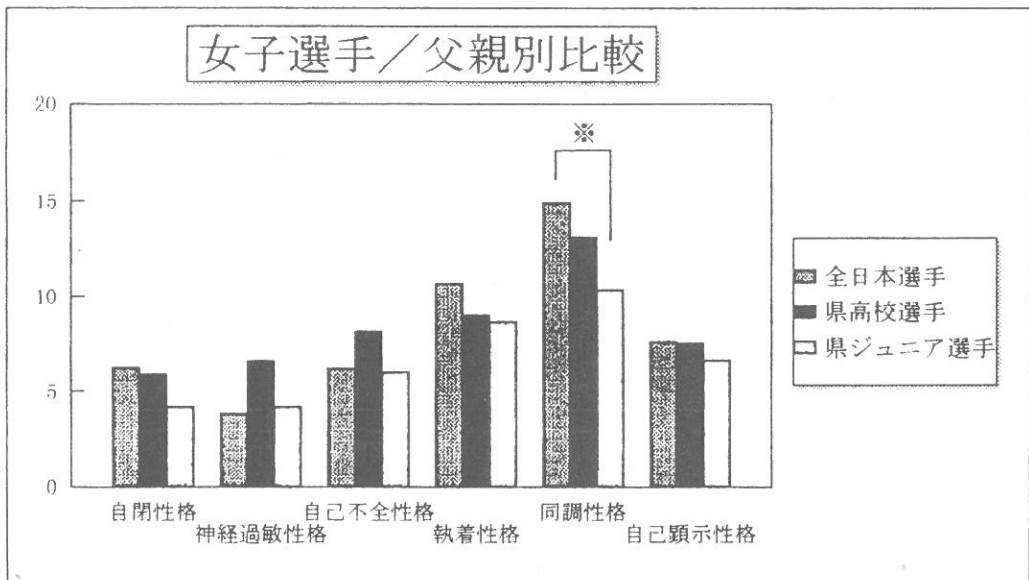


※※ P<0.01 ※ P<0.05

(11) 女子選手父親別比較

自閉性格、執着性格、同調性格、自己顕示性格に同一の順位性が認められる。すなわちジュニア、高校、全日本とクラスが上がるにしたがってスコアが上昇している。また、神経過敏性格、自己不全性格では高校生の父親のスコアが最も高くなっている。順位性が認められた四つの性格群は父親の年齢的な要因を反映しているのか社会的要因を反映しての結果なのかは現時点では判断できないが、いずれにしても選手の気質形成において何等かの影響を与えることは確かであり、さらに詳しく分析する必要がある。(図11)

図11

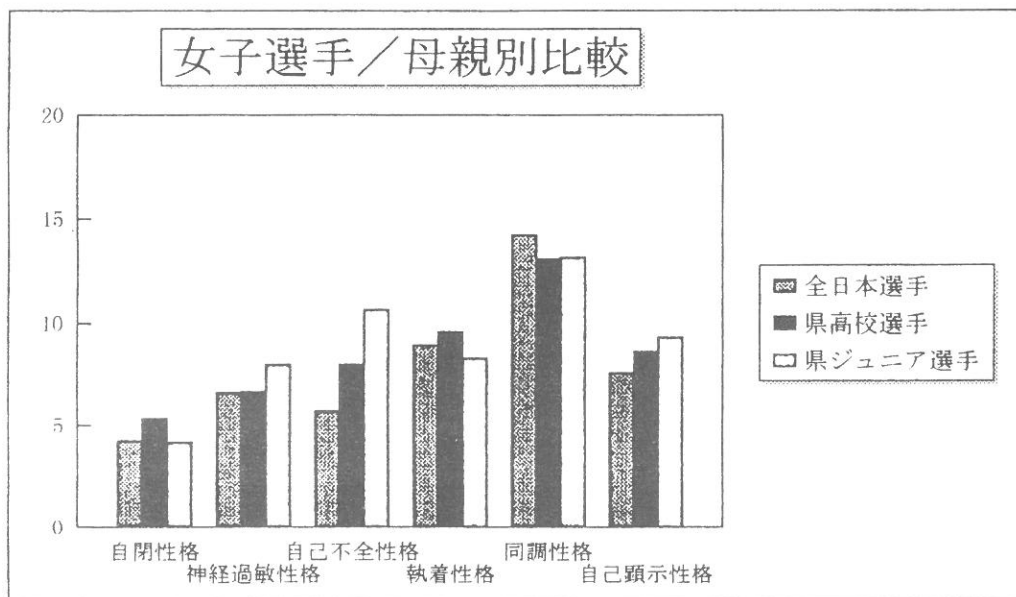


※ P<0.05

(12) 女子選手母親別比較

三者の間に順位性の認められる気質としては神経過敏性格、自己不全性格、自己顕示性格の三つであり、父親とは逆にジュニア、高校、全日本となるに従ってスコアが低下している。この点も先ほどの父親同様加齢による自然的変化なのか母親のおかれた社会的地位によるものなのかは明かにはできないが、女子選手の気質形成に何等かの影響を与える可能性があり、今後さらに詳しく分析して行く必要がある。自閉性格、執着性格では高校生が最も高いスコアを示し、同調性格では全日本選手が最も高いスコアを示している。全体の傾向としては三者ともこれまでの傾向と同じく、同調性格をピークとする右上がりのパターンを示している。(図12)

図12



#### 4. 考 察

##### (1) 男子選手の気質の年齢別発達段階

これまでの結果から、年齢を重ねるにつれて気質構造の進化的プロセスをはっきりと認めるにはいたらなかったが、それぞれの気質で加齢に伴う推移の認められたものについて考察を行っていく。

まず、男子選手では自閉性格、神経過敏性格、自己顕示性格が加齢および競技レベルの向上にしたいスコアが増大して行き、同調性格が逆にスコアが低下して行く傾向が認められている。体力的、技術的、精神的に一応の完成とみられる全日本選手では、7気質中4つで最高得点をマークしており、総じて各気質ともスコアが高い傾向にある。従って、気質の側面からみた、精神性の確立とは気質スコアの高得点化と解釈でき、それぞれの気質が十分に成熟することがトップ選手のための必要条件と考えることができる。

次に、選手の気質的成熟を促す要因は何かという問題になるが、練習環境、指導者、チームメイトなど様々な要因が考えられるが、今回焦点を当てた両親については、まず、父親では7気質中3気質において全日本選手のスコアが最も高く、自己顕示性格以外でもそれなりに高いスコアを示している。一方母親では自閉性格、自己不全性格以外の気質では三者の間に余り差が認められず、全日本選手でも自己不全性格のみで首位を示しているだけである。選手の気質的成熟において両親の気質がどの程度の影響を及ぼすかについて今回の研究では言及できないが、両親を比

較する場合、母親よりも、父親の方が選手に与える影響は大きいのではないかということが、結果から推測できる。

しかし、今回の調査からは、選手の気質的成熟に関しては、ほかの要因が複合的に絡み合って形成されるという見方が現実的であるように思われ、今後指導者、チームメイトの気質調査も併せて行っていくことが課題として明らかになった。

## (2) 女子選手の気質の年齢別発達段階

一方女子選手では加齢および競技レベルの向上に伴い順位性が見られた気質は男子ほど多くはなく、自閉性格で加齢とともにスコアが増大していることと、同調性格で逆にスコアが低下しているという2点のみであった。全体的に男子ほど、各年齢層の間で差がなく、女子では、競技レベルと気質の間の明確な相関関係を見いだすことは難しい状況にある。

また、男子と比較して全日本選手の各気質のスコアもかなり低く、この点からも競技成績と気質の関連を結論付けることは難しい状況にある。女子選手でこのようにスコアが低いことの背景には、わが国の女性に対する社会通念など女性を取り巻く教育環境に大きく影響されていると思われる。すなわち、これら7気質はいずれも個性を形成する上で重要な役割を担うものであるが、女子選手の場合、同調性格のスコアのみが著しく高く、周囲の人間関係に気を使いながら、自らの自己主張を極力抑えようとする日本的な女性像が浮かび上がってくる。この点を考えるに当たっては外国人選手とくに欧米選手の気質調査を実施し、その比較によりわが国の特異性を実証することが必要である。

女子選手の場合も男子選手同様、その気質の形成に当たっては、指導者、練習環境、チームメイトなど選手を取り巻く多くの人間関係が関わっていると考えられるが、今回焦点を当てている両親について考えてみると、まず父親では選手よりも多くの気質で加齢に伴うスコアの順位性が認められている。すなわち、自閉性格、執着性格、同調性格、自己顕示性格の4つでわずかではあるが加齢に伴いスコアの上昇が認められている。これが選手の競技レベルを反映するものなのか、それとも父親の年齢的発達段階によるものなのかは、ここで明らかにすることはできないが、以上のような順位性が認められることは選手の気質形成に何等かの影響を及ぼしているものと考えることができる。一方母親は父親とは逆に、神経過敏性格、自己不全性格、自己顕示性格の3つで加齢とともにスコアが低下する現象が認められた。これも父親同様、選手の競技レベルによるものなのか、母親の加齢によるものなのかは、明かには結論できず、父親、母親の気質が選手の気質形成にどの様に影響しているのかを言及するまでにはいたらなかった。

## (3) 男子選手の気質的特異性

前回の調査では一流選手では執着性格がポイントとしてクローズアップされたが今回のレベル別の調査では、執着性格と共に自己顕示性格、自閉性格も一流選手になるためには必要な気質で

あることが明かとなった。ただ、この気質の獲得に当たっては、今回の調査からは両親の影響がどれほどあるかについては言及することができず、むしろ、チームメイトや指導者などが大きく影響しているのではないかと思われる。一流選手の気質特性はほかの選手に比べて、分かりやすく表現するならば、自己の世界に閉じ込み、技術勝負にこだわり、目だちたがりの性格という、かなり幼児性を残した気質特性とすることができる。このような気質特性を形成するためには、一般常識的な社会化はむしろ逆効果であり、個性を重視する教育を実施する必要がある。そのため、今日の日本のスポーツ界に一般に散見される保守的な価値観では選手育成には支障をきたすと言えなくもない。ともすれば指導者は、一般社会常識にそえるよう選手をきびしく教育することになりがちであるが、今回の結果から、選手の個性を重視した指導を心がけ、あまり型にはめないよう注意する必要があるのではないだろうか。

#### (4) 女子選手の気質的特異性

前回の調査では女子選手においても男子選手同様執着性格がクローズアップされたが、今回の調査からは、自閉性格のみがほかの選手よりも統計的に有意性が確認されただけであり、女子選手においては、年齢別、競技レベル別の気質的特異性は認めることができなかった。従って、女子選手においては競技成績と気質はあまり関係がなく、ほかの精神的要因が競技成績に何等かの影響を与えているとみるべきであり、今後の課題として取り組んでいかなければならない。

いずれにしても女子選手は周囲に気を使いながら、自己主張を極力抑えて日々練習に励んでいる姿が浮かび上がってくる。ほかの種目のデータがないので今回の結果からはどんな結論を導き出すこともできないが、今日的女子体操の国際競争力を見てみると、この気質特性で果してよいのだろうかという疑問も浮かんでくる。今後、世界のトップレベルにある女子オリンピックチームの気質調査も実施し比較研究を行っていくことが必要である。

#### (5) 親から子への気質の継承について

前回の全日本選手の調査からは、選手の気質形成に両親の気質がかなりの影響を及ぼしていることが明らかにされたが、今回の調査では県高校生、県ジュニアの選手には同様の傾向ははっきりとは認められず、ある程度の気質継承が行われるのはトップレベルの選手のみではないかという仮説も考えられる。全日本選手以外で親子間である程度の気質の類似性が認められたのは、県ジュニア男子と県高校女子であり父親、母親の関連度に関しては明らかにすることはできなかった。今後競技レベルをさらに厳密に特定して、レベル毎の親子間の気質の相関について研究を進めていきたい。従って現在の時点で、親子間の気質の継承について言及することはできないが、あえて仮説的に提示するならば競技レベルが高くなるほど気質継承の割合は高くなるのではないだろうか。もしそうであるならば、将来トップ選手に成長する選手の両親は早い時期にトップ選手と類似した気質を獲得していることになり、選手の両親の気質調査により、その選手の将来性

がある程度予測できるということも起こりうるが、この点に関しては今後さらに詳細な継続研究を行うことにより、競技レベル毎の気質特性の変動モデルを明らかにするなかで実施していきたいと考えている。

#### (6) 今後の課題

2回の調査により体操競技選手の気質特性について言及してきた。そのなかで気質形成における両親の影響度について一貫して追跡してきたが、現時点ではその関与の割合については結論することはできず、年齢、競技レベル、性別によりかなりのばらつきがあることが明らかにされた。さらに、気質形成においては、本人の生活環境、とりわけ社会的人間関係が複合的要因として大きく影響していることが仮説として提示され、今後、これら複合的要因を形成する選手の社会的人間関係を軸に調査を進めて行くことが今後の課題として明らかにされた。

それらの調査により十分なデータを蓄積した後に、それぞれの要因の選手の気質形成に対する後見度の測定が可能となり、さらに有効な心理的支援のツールとなることが可能となるであろう。当面、選手の競技レベルの厳密なクラスターを作成し、それに基づく、選手の指導者やチームメイトなど、選手の練習環境に係わる人間の気質調査を実施していきたいと考えている。

#### 引用・参考文献

- 1) Allpor, G. W., (豊沢 登記) : 人間形成—人格心理学のための基礎的考察—, 理想社, 1959.
- 2) Allpor, G. W., (今田恵監訳) : 人格心理学 上・下, 誠心書房, 1972.
- 3) 岡沢祥訓 : 卓球選手の心理的適性に関する研究, 中京女子大学紀要第19号73—77, 1985.
- 4) 角川雅樹, 高宮 靖 : 体育学部学生の性格特性に関する調査研究, 東海大学紀要体育学部第17号22—36, 1987.
- 5) 小林 登監修 : 別冊発達—乳幼児の発達と母と子の絆—, ミネルヴァ書房, 1987.
- 6) 後藤清志, 清水正典, 梶谷信之 : スポーツ選手の人格構造Ⅰ, 岡山県立短期大学紀要第34巻, 1991.
- 7) 後藤清志, 清水正典, 梶谷信之 : スポーツ選手の人格構造Ⅱ, 岡山県立短期大学紀要第35巻, 1991.
- 8) 後藤清志, 清水正典, 梶谷信之 : スポーツ選手の人格構造Ⅲ, 岡山県立短期大学紀要第36巻, 1991.
- 9) 佐藤俊昭 : 子どもの気質の追跡研究—序報—, 東北大学教養部紀要第43号, 1985.
- 10) 鈴木昭寿, 小林渡岐磨 : 体操競技選手の性格特性の考察, 東海大学紀要第11号19—28, 1981.
- 11) ステラ・チェス, アレクサンダー・トマス, (林 雅次) : 子供の気質と心理的発達, 星和書房, 1981.
- 12) 花田敬一 : スポーツマン性格, 不昧堂出版, 1968.

- 13) 半田智久：パーソナリティ。新曜社，1994.
- 14) 藤原喜悦：発達・性格心理学。交成出版社，1987.
- 15) 藤原健固：スポーツマンと性格。講談社，1983.
- 16) 古田倭文男，佐藤俊昭：気質の概念をめぐる諸問題。宮城学院女子大学研究論文集63号57-75，1985.
- 17) 星野 命，青木孝悦，宮本美沙子，青木邦子，野村 昭：オルポートパーソナリティーの心理学。有斐閣，1982.
- 18) 前田喜平，三宅和夫：別冊発達8－発達検査と発達援助－。ミネルヴァ書房，1988.
- 19) 松田岩男，猪俣公宏，落合 優，加賀秀夫，下山 剛，杉原 隆，藤田 厚，伊藤静夫：スポーツ選手の心理的適性に関する研究。昭和55年度日本体育協会スポーツ科学研究報告第1報，第2報，1980.

(平成8年10月31日受付)  
(平成8年12月25日受理)

